

5. シンポジウムの開催

本モデル事業の成果を医療関係者、及び一般の方々に報告し、今後に向けた発展性を検討するため、「医療安全を考えた産科施設の安全と質に関するモデル事業」報告会を行った。

日時等は、以下のとおりである。

- ・ 日時：平成 18 年 2 月 19 日（日）13:30～16:30
- ・ 場所：日本赤十字看護大学 201 号室
- ・ 会費：無料

内容は、以下のとおりである。

- ・ あいさつ（主任研究者 日赤医療センター 産婦人科部長 杉本充弘）
（厚生労働省 医療安全推進室 田原克志）
- ・ 事業報告（日赤医療センター 副看護部長 村上睦子）
- ・ 基調講演（主任研究者 日赤医療センター 産婦人科部長 杉本充弘）
- ・ シンポジウム
産科医の立場から（日赤医療センター 産婦人科副部長 笠井靖代）
勤務助産師の立場から（日赤医療センター 助産師 筏井沙織）
母親の立場から（モデル事業対象者：YS さん(モデルⅠ)、HK さん(モデルⅡ)）
開業助産師の立場から（鳴原助産院 院長 鳴原 操）
社会科学の視点から（三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング）
- ・ ディスカッション
- ・ まとめ（主任研究者 日赤医療センター 産婦人科部長 杉本充弘）

当日は、助産師等の医療関係者を中心に、100 名程度の参加者があった。

なお、本報告会の参加者に対して、参加者の職種、本報告会を知った方法、モデル事業（モデルⅠ、モデルⅡに対する考え）、出産に関しての考え、報告会に関する意見を尋ねるアンケート調査を実施した（回収数 82 件）。

B-2 研究体制

1. 研究班名簿

本調査研究の体制は、次のとおりとなっている。

(主任研究者)

日本赤十字社医療センター 産婦人科部長 杉本充弘

(研究協力者)

日本赤十字社医療センター 看護副部長 村上睦子

日本赤十字社医療センター 産婦人科副部長 石井康夫

日本赤十字社医療センター 産婦人科副部長 笠井靖代

日本赤十字社医療センター 看護師長 赤山美智代

日本赤十字看護大学 教授 平澤美恵子

日本赤十字看護大学 助教授 谷津裕子

みづき助産院 院長 神谷整子

2. モデル事業実施者

(開業助産師)

みづき助産院 院長 神谷整子

鳴原助産院 院長 鳴原 操

橋本助産所 院長 橋本初江

(日赤医療センター)

日赤医療センター助産師

3. 委託先

三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社 公共経営・公共政策部
保健・医療・福祉グループ 研究員 石垣 千秋

三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社 公共経営・公共政策部
保健・医療・福祉グループ 研究員 小川 美帆

B-3 研究経過

本調査研究の実施にあたり、下記のスケジュールにて、研究班会議、助産所と病院の連携についてのミーティング、ワーキンググループを開催した。

(研究班会議)

- ・ 第1回 平成17年5月19日
- ・ 第2回 平成17年8月5日
- ・ 第3回 平成17年9月9日
- ・ 第4回 平成17年10月7日
- ・ 第5回 平成17年11月4日
- ・ 第6回 平成17年12月13日
- ・ 第7回 平成18年1月11日
- ・ 第8回 平成18年2月9日

(ワーキンググループ)

- ・ 第1回 平成17年4月28日

C 研究結果

C-1 対象者詳細インタビュー調査

1. 出産場所の選択／モデル事業に参加した動機

(1) モデルⅠについて

モデルⅠの参加者7名のうち、2名に出産経験がある。1名は、前回は病院で出産を経験しているものの、その後かかった乳腺炎の治療で助産師と出会い、今回の出産では継続的な関係がある助産師のケアを依頼した。もう1名は、クリニックでの出産を経験したものの、出産に満足を得られず、2人目は助産所で出産。しかし、その助産所のケアにも満足できず、3人目を自宅出産。今回は、3人目の出産を手がけた助産師との継続的な関係から、モデル事業への参加につながった。

ほかの4名は「自然なお産」、ホメオパシー、東洋医学に関心を示しており、助産所での出産を希望していた。もう1名は、既にモデル事業の対象者に決まった友人から勧められて、モデル事業に加わった。

【経産婦】

- ・ 1人目は、自宅近くの産婦人科病院で出産。その後、乳腺炎で乳房が石のように腫れてしまった。1人目の体験を踏まえ、妊娠から出産まで同じ助産師によるケアを受けたいと考えていた。そのため、最初からA助産院での出産を希望していた。
- ・ 1人目は、実家近くにある産科専門のクリニックで出産したが、医師の処置が外科的なのが嫌だった。2人目は、都内の助産所で出産。家庭的な雰囲気ではあったが、助産師が「経営者」の意識が強い人で、サービスに満足することが出来なかった。3人目は、B助産師の介助による自宅出産。今回も開業助産師の介助を受けて出産したいと思った。知人から、病院では陣痛の時に放っておかれるという話を聞いて、出産の際は助産師についていてほしいと考えた。

【初産婦】

- ・ 「自然なお産」を希望しており、なるべく医療の介入を受けたくない。出産は病院で行わなければならないという考え方には疑問を感じる。自宅での出産を希望していたが、子宮筋腫があり、また、30歳くらいまで鼻血が出ると止まらないという症状があったため、自宅や助産所での出産は無理であると言われていた。

- ・妊娠初期の段階で、生理の遅れが見られたので、近所の病院で受診した。しかし、病院内が閑散としており、管理が杜撰な様子が見られたため、別の病院を探すことにした。その結果、日赤医療センターで受診した。
- ・日赤医療センターは、妊娠中に通っていたバースクラスであげられた病院の候補の中から、「自然なお産」や母乳育児を推進している、また自宅から近いという理由で選択した。
- ・親戚の医療関係者が「出産は何が起こるかわからない」といっていたことや、自分が丈夫な子どもを産めるかどうかかわからない、また、親戚が出産した病院の方が安心だと考えており、出産については、全面的に病院の方がよいと考えていた。最終的にはA病院か日赤医療センターで出産するつもりでいたところ、職場の同僚に開業助産師のケアを受けながら日赤医療センターで出産するという人がおり、自分もモデル事業に関心があると申し出た。

出産の安全性についての認識は、「出産については、全面的に病院の方がよいと考えていた」「子宮筋腫があり、バックアップの医療機関が必要だった」「通常のケアについては助産所の方が蓄積があり、むしろ安全ではないか」という意見だった。東洋医学や代替医療に興味を示しながらも、病院での出産に否定的な態度はとっていない。今回、モデル事業に参加した開業助産師によると、これは助産所での出産を固く希望する利用者とは異なる傾向であり、今回のモデル事業の対象者に特徴的な態度であるとのことだった。

- ・西洋医学は、比較的重症の「病気」に対しては有効である一方、「健康～やや不調」といった症状に対しては有効でない。そして、出産は「病気」ではないので、西洋医学に頼らずに行うべきではないか。十分な「通常のケア」を受けていれば、医療処置が必要な事態も防ぐことが出来るが、「通常のケア」については助産所の方が蓄積があり、むしろ病院よりも安全であると考えた。
- ・親戚の医療関係者が「出産は何が起こるかわからない」といっていたことや、自分が丈夫な子どもを産めるかどうかかわからない、また、親戚が出産した病院の方が安心だと考えており、最終的にはA病院か日赤医療センターで出産するつもりだった。医療関係者の親戚の言葉もあり、出産については、全面的に病院の方がよいと考えていた。
- ・以前から、会陰切開などの医療処置は最低限にとどめ、「自然なお産」をしたいと考えていた。出産に対して「こわい」「痛い」というイメージを持っていたが、

バースクラスや本で出産の様々な方法を勉強して、素晴らしい経験を自分も体験してみたいと思うようになった。

- ・ 出産にあっても、なるべく薬を使いたくない、会陰切開を行いたくないと思っていた。妊娠を確認した近所の婦人科のクリニックで子宮口の近くに6センチの子宮筋腫があることが分かった。B助産師が、バックアップの医療機関を探したが、適当なところが見つからず、日赤医療センターで診察を受けた。

モデル事業への参加の動機としては、モデルⅠの対象者は、モデルⅡの対象者と大きく異なり、開業助産師のケアと病院のバックアップとなっている。モデルⅡの対象者のように、訪問健診による通院時間の短縮や、費用には関心を持っていない。

- ・ モデル事業は、自分の希望（自宅、あるいは助産所での出産）と家族の意見（自宅、助産所は不安）との折衷案として、ちょうどよい内容であると考えた。
- ・ B 大学医学部附属病院で血液検査を受けたところ、数値が高く、A 助産院での出産を認められなかった。B 大学医学部附属病院は母子別室とのことだったが、産後子どもと離されるのが嫌で、切羽詰った状況の中、B 助産師からモデル事業の説明を受けた。
- ・ 血液型が RH-、以前の出産で出血量が多かった、産後の注射に拒絶反応を起こしたということから、出産のリスクが高い。また、4 人目の出産ということもあり、C 助産師に、医師のいる病院で出産した方がよいと言われた。
- ・ 妊娠中は仕事が忙しく、健康管理が出来るかどうか自信がなかったこと、また、両親に心配をかけたくなかったことから、助産所あるいは病院のどちらで出産するか迷っていたところ、日赤医療センターの助産師から、モデル事業への参加を勧められた。
- ・ 家庭的な雰囲気でのケアも受けながら、医療面ではしっかりしたバックアップ体制があるのはよいと思った。少子化の中で出産に関するデータを提供したり、助産師の育成の面で役に立ち、今後の妊婦に、楽しく安心できる環境を提供することができればよいと思った。
- ・ バースコーディネーターから、開業助産師のケアを受けながら、自宅以外の場所で出産できるシステムがあると聞いた。その開業助産師の優れた評判については、以前から本や雑誌から情報を得ていたもので、魅力的なシステムであると考えた。

- ・自宅から日赤医療センターまで片道1時間かかること、8月が出産予定なので、妊娠後期には通院がづらいと思ったこと、病院では医師が忙しいので、ゆっくり診てもらえないのではないかと考えたので、モデル事業に加えてもらったのはありがたかった。自分の出産についても、いろいろ要望があるので、じっくり聞いてもらいたかった。

不安を感じた内容については、バースプランがどれだけ尊重してもらえるかという内容があげられていた。

- ・バースプランでこちらの要望を取り入れてもらえるということだったので、病院で出産することへの不安はなかった。また、日赤医療センターの担当助産師ともコミュニケーションをとるうちに、不安が解消されていった。

(2) モデルⅡについて

モデルⅡの対象者11名のうち、8名に出産経験があり、1名を除いて7名は前回の出産も日赤だった。8名のうちの1名は、パリでの出産を経験している。

初産の2名は、「姉（助産師）が日赤医療センターに勤務していたため」「友人が日赤医療センターの助産師だった」ことをきっかけにモデル事業に参加した。

【経産婦】

- ・前回、日赤医療センターで出産し、満足感が高かった。他のところのことはよく分からないので、かえって不安。日赤医療センターであれば、何かあった時も設備等がそろっているので安心だと考えた。
- ・1人目の妊娠前、喘息で通院していた日赤医療センター呼吸器科で、産科を紹介された。診察は個室で、また、対応が丁寧で優しかった。今回、つわりの症状が重かったので、入院の必要があれば日赤医療センターがよいと考えていたところ、モデル事業に参加する方法があることを聞いた。
- ・1人目の時、日赤医療センター助産師の対応が素晴らしかったこと、また、勝手が分かっている病院の方が楽なことから、迷わず日赤医療センターでの出産を決めた。
- ・1人目、2人目の時、母乳育児の指導が優れていたため、また日赤医療センターで出産することを考えた。

- ・ 1人目の出産の際、日赤医療センターの助産師の対応、母乳育児への取り組みがよかった。
- ・ 勤務先が日赤医療センターの隣にあるため、通院が楽であること、また、日赤医療センターに知り合いが多く、安心であることから、出産場所として選択した。日赤医療センターが「赤ちゃんに優しい病院」の認定を受けていることも、考慮した要素のうちのひとつ。
- ・ 1人目はパリで出産。日赤は助産師による母乳ケアの質が高いと聞いていた。
- ・ 1人目は、日赤看護大学を卒業した義理の妹からの勧めで日赤医療センターで出産。K助産師が担当。2人目も日赤医療センターでK助産師が担当。今回も、K助産師に担当してもらいたかった。

【初産婦】

- ・ 看護学校の教員をしている義妹のつてで、日赤医療センターの話をきいた。日赤医療センターは助産師の数が多いので、面倒をよく見てもらえるのではないかと考えた。
- ・ 姉（助産師）が平成17年3月まで日赤医療センターに勤務していたため。実家が九州で、周りに姉以外の身内がいなかったため、姉に出産に立ち会ってほしかった。日赤医療センターは、どういう出産をしたいかについて本人の希望をきいてくれることも、動機のひとつであった。
- ・ 平成17年1月に、夫の仕事の都合で急に鹿児島から東京への転勤が決まった。仕事が忙しい夫が立ち会えるように、東京で出産することにした。日赤医療センターについては、助産師として未熟児室で働いている友人（T助産師）がいるため、話を聞いた。

安全性についての認識については、多くの対象者が、日赤医療センターが他の医療機関からも搬送先になっているという事実を考慮し、何かあった場合も、最初から日赤医療センターを受診していた方が安全と考え、受診先を選択していた。

【経産婦】

- ・ 生理痛が重く、子宮内膜症を患った時期があったため、自分に何かあった場合に対する不安があった。何かあった場合は、いずれにせよ日赤医療センターに搬送されるのであれば、最初から受診していた方が安心だと考えた。

- ・自分よりも子どもが無事に生まれてくるかどうか気になっていた。日赤医療センターは新生児の医療体制が整っており、もし日赤医療センターで問題が生じるのであれば、どこに行っても同じ結果になるだろうと納得することが出来た。
- ・40歳以上の高齢出産であったため、万一の時のバックアップ体制が整っていることが出産場所選択の基準であった。

【初産婦】

- ・万一の場合も、日赤医療センターのような大病院であれば安心だと考えた。
- ・病院で助産師として働いていたが、自分の出産はどのようなのかと心配だった。所属が分娩室だったので、外来の知識がなかった。日赤医療センターはフリースタイルの出産に取り組んでおり、また、安全性の面からも間違いないだろうと考えた。

モデル事業に参加した動機としては、「同じ助産師の方に継続して担当してもらえる」「自宅で健診を受けられるのが魅力」「出産費用が安い」等があげられていた。日赤医療センターでケアを受けたいと希望しながら、日赤医療センターが自宅から遠いことや、健診に時間がかかること等を、訪問健診によって解消できることが魅力と感じている。

【経産婦】

○訪問健診

- ・上の子の面倒を見る必要があるので、自宅で健診を受けられるのは魅力的だった。
- ・日赤医療センターに通院しなければならないと考えていたので、「ラッキー」だと思った。
- ・訪問健診を受けられるのが最大のメリットであり、病院に行く回数が減る方が楽だと考えた。
- ・訪問健診に魅力を感じ、説明を受けてすぐに「絶対お願いしたい」と思った。上の子がいると幼稚園のお迎えの時間等に対応しなければならず、病院の待ち時間が苦痛である。
- ・自宅が日赤医療センターから遠いことが「ネック」だったこと、また、上の子がいることから、モデル事業で訪問健診が受けられると聞いて、すぐ参加したいと考えた。

- ・病院での健診は半日あるいは1日ばかりという状況なので、病院に来なくても健診が受けられることは、仕事をもつ妊産婦にとってありがたいと思った。
- ・遠くの病院まで通う必要がないこと、助産師と密な相談ができることがよいと思った。
- ・（義母が経営する幼稚園の経理の）仕事をしているので、モデル事業はありがたい。

【初産婦】

○同じ助産師

- ・正直なところ、モデル事業であれば、よく見てもらえるのではないかと思った。同じ助産師の方に継続して担当してもらえる点がよかった。

○出産、入院費用

- ・出産費用が安いと聞いたため。
- ・入院期間が短く、また、入院費用が安いのがよいと考えた。

その一方、モデル事業に対する不安については、費用や個人情報の問題等あげられていたが、特に入院期間に対する不安があげられていた。当初モデル事業で想定していた1～2日という入院期間には、不安を覚えるという意見もあった。初産婦の場合には、初めてで不安なので長く入院したいという希望がある一方、経産婦の場合には、「入院中しか休めないの、通常通り（長く）入院したい」という声もあった。

【経産婦】

- ・もし初めての出産であればエコーが見たいので、参加しなかったかもしれない。
- ・研修医が担当するものでないかどうか気にかかった。
- ・費用がどの程度になるか心配であった。個別に訪問健診を受ける場合、その分費用がある程度高くなることは受け入れられるものであったが、一定の金額以上は支払いが難しい。
- ・入院期間が1～2日というのは、あまり好ましくなかった。入院中しか休めないの、通常どおり入院したいと思った。
- ・個人情報保護が徹底されるのであれば参加してもよいと考えた。

- ・担当助産師を信頼していたので、訪問健診については、特に不安はなかった。
- ・1人目の時と同じ助産師に担当してほしかったので、誰が担当することになるかわからないと言われた時は、参加するかどうか迷った。

【初産婦】

- ・実母は、モデル事業の入院日数が短いことに不安を覚えていた。入院日数については変更可能ということだったので、参加することにした。
- ・何か問題があれば、途中で参加をやめることも出来るとのことなので、やるだけやってみようと考えた。

2. 訪問ケアの利点／課題

(1) モデルⅠ

多くの対象者から、「リラックスできる」「時間をかけて見てもらえる」「マッサージを受けられたのが良かった」「精神的に落ち着ける」等があげられている。

自分の生活空間で、継続的な関係があり、信頼できる助産師から、時間をかけたケアを受けることにより、リラックスすることができ、また自分の不安や悩みの表出もしやすくなっている。

助産師から、アロマセラピーやホメオパシーによるケアを受け、自分の状態にあったケアを受けられているという満足度も高い。助産師から医師と異なる情報が得られ、精神的な安定が得られたり、セルフケアにつながっている側面も見られた。

【初産婦】

○リラックス

- ・病院での健診は緊張してしまうのと比べて、訪問健診では、リラックスしてマッサージを受けたり、悩みや問題点を助産師に相談したりすることが出来た。
- ・訪問健診では、おしゃべりしながら過ごすなどリラックスしているので、病院での健診の時より、血圧が低かった。リラックスできるかどうかによって、体調自体が変わってくると思う。
- ・病院での健診と異なり、エコーは見られないが、心音をきいたり、マッサージを受けたりして、リラックスすることが出来た。

○医療とは異なるケア

- ・訪問健診では、細かいことをいろいろ教えてもらえたのがよかった。教えてもらわなければ、自分では気づかないことも多かった。
- ・妊娠後期に「むくみ」の症状が現れたが、B助産師がアロマセラピーやホメオパシーの技術をたくさん持っていたことに、非常に助けられた。ただ「受け身」の状態にいるのではなく、アロマセラピーやホメオパシーなど何かすることがあるのはよかった。何かトラブルを抱えたまま出産に臨むことは不安感につながるので、出産前に「むくみ」の症状を解消出来てよかった。
- ・助産師と話すとは医師とは異なる角度の情報が得られて面白かった。また、精神的にも落ち着いた。

- ・ 自宅で行ったのは、尿検査、腹囲測定、マッサージである。貧血があったので、食生活の指導もしてもらった。時間は1時間弱だった。

○移動の負担の軽減

- ・ 妊娠中は移動が大変なので、自宅まで来てもらって非常に助かった。
- ・ 妊娠後期は、切迫早産のため、自宅で安静にしていなければならなかった。そのため、訪問健診を受けることが出来て、非常に助かった。

○待ち時間の減少

- ・ 自宅では待ち時間がないことがよい。
- ・ 自宅での健診は、病院のような待ち時間がなく、気持ちが良かった。

○ケアにかかる時間

- ・ 病院での健診と比べて、時間をかけてケアをしてもらうことが出来る。（病院では、長時間話をする事は出来ず、ポイントをしぼった質問をすることしかできない。）
- ・ 訪問健診では、時間がたっぷりあるので、医師に尋ねるまでもないような生活面の細かい疑問について、担当助産師に質問することが出来た。
- ・ ゆっくり話ができてよい（周囲のこと等を何も考えず、よもやま話ができる）。

○助産師とのかかわり

- ・ 妊娠中の時点で、どの助産師が出産に立ち会ってくれるのか分かっていたのは心強かった。

さらに、本人だけではなく、配偶者も助産師に会う機会があり、信頼を深めていく機会もあった。また、上の子どもが訪問健診に同席してなついているという声もあった。

- ・ 初回の訪問健診には、夫も同席した。A助産師が信頼できる方でよかったと言っていた。
- ・ 上の子が訪問健診に同席した。C助産師とは普段から付き合いがあるため、上の子もなついている。

一方、通院健診では、「待ち時間はそれほど気にならなかった」ということだが、遠方から通院している対象者は、通院時間等が気になっていたようである。節目の時期に「日赤医療センターで見てもらえたのは安心」という意見があり、病院で健診を受けることが安心につながっていることが伺える。また医療処置を行いたくない等の強い希望を持っている対象者は、医師に要望を伝えることができたなどという声もあった。

【経産婦】

○時間

- ・待ち時間の長さはあまり気にならなかった。なお、大学病院では、1時間待ちは当たり前という状況であった。
- ・医師の診察は、それほど待たずに受診することができた。しかし、医師の診察の後、助産師の診察を受けるまでの間に1時間くらいの待ち時間があった。医師よりも助産師の方が話しやすく、1人あたりに時間がかかると思われるため、仕方がないと思うが、混んでいる時は許容範囲を超える。

○健診の対応

- ・健診は、ゆっくり丁寧に対応してもらうことが出来た。

○助産師の同行

- ・担当助産師がついていてくれるのは心強かった。また、初回はB助産師も健診に同行した。
- ・通院定期健診は、訪問健診と交互に受診した。C助産師も毎回同席した。

○医師の対応

- ・担当医はS産科部長。どんな人なのか不安で、インターネットで調べたところ、評判が良かったので、初対面の前から好印象を持っていた。実際に会ってみると、思ったとおりの明るくて気さくな人で、話も十分に聞いてもらった。

【初産婦】

○時間

- ・待ち時間は30分から1時間程度あったが、それほど気にならなかった。
- ・一番に病院に到着すれば30分待ちで済むことが分かり、最後の方は朝早く病院に

行くようにした。

- ・1度だけ2～3時間ほど待たされたことがあった。通常は20～30分程度の待ち時間ですんでいた。
- ・待ち時間は、診療時間を含めて2時間程度であったが、以前通っていた病院では4時間から6時間かかっていたので、まだ許容出来た。

○予約

- ・担当医師は人気があるため、予約がとりづらかった。いったん予約を入れた後、時間変更をすると、別の医師になってしまう。

○情報連絡

- ・A助産師と日赤医療センターの連絡が、二度手間になることが多く、スムーズでなかった。当事者が3者（対象者、A助産師、日赤医療センター）になるため、自分が同じことをA助産師と日赤医療センターの両方に確認しなければならなかったり、A助産師が健診の結果を何度も記入しなければならなかったりすることがあった。

○病院の空間

- ・設備は、病院特有の殺風景な様子で、落ち着かなかった。インテリア、照明などもう少しリラックスできるようなものであるとよい。

○医師、助産師の対応

- ・医師や助産師の対応について、特に困ったことはなかった。
- ・医師は忙しそうで、ゆっくり話をすることは出来なかったなので、質問したいことを予め控えておくようにしていた。
- ・医師には、医療処置のこと等、自分の要望をなるべく伝えた。子宮筋腫からの出血は心配だったが、特に母乳で育てたいので、よほどのことがない限り、輸血はしたくないということは伝えて、医師からも「わかりました」と言ってもらえた。
- ・ほとんどの検査は前の病院で済んでいたが、診察の時はやはり緊張した。
- ・妊娠の経過等については、日赤医療センターの担当助産師が丁寧に説明してくれたので、十分満足している。

○頻度、意義

- ・通院定期健診で、大事な区切りに日赤医療センターで見てもらえたのは良かった。
- ・通院定期健診は月 1 回。ただし、7 か月以降は、切迫早産になったこともあり、月 2 回程度の健診を受けた。
- ・通院定期健診で、大事な区切りに日赤医療センターで見てもらえたのは良かった。

○その他

- ・エコーは、胎児が小さいうちは写真をもらってうれしかったが、大きくなってからはあまり画像がはっきりせず、よくわからなかった。
- ・事務職員の対応は、特に問題はなかった。

(2) モデルⅡ

多くの対象者から、「マッサージを受けられてよかった」というほか、「ぬいぐるみを使った出産のシミュレーション」や、「お腹をさわりながら、胎児の頭や足のある場所を教えてもらった」といった、病院では十分にもたらされない情報を評価する声があった。

そのほかには、「決まった助産師にきてもらうことでゆっくり話しができる」「リラックスして受診することができる」「自分だけの時間・空間を持つことで、リラックスすることができる」「細かいことを質問することができた」等の意見が多い。

また、経産婦では、子どもを病院に連れて行く必要がないということが大きなメリットになっていることがあげられた。また、訪問健診の時には、担当助産師に子どもがなついて、遊び相手になってもらったり、心音を聞いたり、お腹を触ったりしたということを経験する声もあった。

自宅では、配偶者や実母も一緒に話を聞いて、疑問を解消したりする機会があり、家族で助産師とかかわりながら、不安を解消し、出産に向けての準備が整っていく様子が見られた。

その一方、「訪問健診ではエコーが見られなかったのが残念」という声もあった。実際、モデル事業の対象者の選定を行う場合に、「エコーを見たいから」という理由で、対象者になるのを辞退した妊婦もいた。

【経産婦】

○ゆっくり話せる

- ・担当助産師には、細かいことでも相談しやすく、ゆっくり話すことが出来た。
- ・妊娠中のトラブル、上の子の話など非常に些細なことまで質問することが出来た。
- ・ロンドンで受けたケアの内容と同じだったので、何の不安もなく楽しく話が出来た。
- ・（職場健診）病院に比べて、職場健診では、自分だけの時間・空間をもつことで、リラックスすることができた。
- ・担当助産師には、医師に聞くまでのことではない、細かいことを質問することができた。
- ・（自宅健診）畳のあるスペースで、身体のゆがみなど細かい点をみてくれた。職場健診よりもさらにリラックスすることができた。
- ・ゆっくり話しがしやすくよかった。一度整体をしてもらったことがあった。
- ・訪問健診は1回あたり1時間以上かかり、担当助産師とゆっくり話しをすることが出来た。
- ・病院での健診は、時間が遅れがちのため、次の人の順番が気になり、あまり細かい話ができない。その点、訪問健診では、妊娠中のトラブル、上の子の話など非常に些細なことまで質問することが出来た。
- ・担当助産師には質問がしやすく、不安なことは全て質問することが出来た。
- ・担当助産師が毎回同じであるのは心強い。安心して任せることができる。

○病院にはない独自のケア

- ・マッサージやぬいぐるみを使った出産のシミュレーションなど、病院では出来ないことをしてもらった。1人母親学級のようなもの。毎回、決まった助産師の方に来てもらえると、ゆっくり話が出来るので有難い。
- ・病院での健診と比べ、モニターが見られなかったのは寂しかったが、担当助産師がお腹を触りながら、胎児の頭や足のある場所を教えてくれたのは、病院では出来ない経験であった。
- ・担当助産師がお腹を触り、胎児の背中や足のある場所について、1人目の時より

詳しく教えてもらった。

○セルフケア

- ・上の子がいるとその世話にかかりきりで、自分の身体のケアは後回しになってしまう。身体の状態について、担当助産師に丁寧に教えてもらえたのはよかった。

○助産師とのかかわり

- ・1人目の出産が大変だったので、「痛み」に対する不安があり、鬱々としていた。1人目を出産すると、（あまりにも大変なので）2人目の出産が嫌になってしまう。出産前の悩みは、担当助産師に相談することで完全に解消される訳ではないが、だんだん担当助産師に対する信頼感が生まれ、安心感につながった。
- ・静脈瘤が出来た時、担当助産師が真剣に考えてくれたのはありがたかった。足のマッサージを受けたが、病院では椅子に座っているので、マッサージは出来なかったかもしれない。果たして無事に出産をクリアできるのかどうか不安でいつも担当助産師に元気づけてもらった。

○移動の負担の軽減

- ・通院に片道2時間以上かかるため、訪問健診により通院負担が減った。
- ・上の子を連れて病院に行かなくて済んだのはとても楽だった。自宅と病院の往復は身体的な負担が大きいので、移動時間がないのは楽だった。

○その他

- ・病院での健診と異なり、訪問健診では、健診のついでに胃薬や便秘薬を処方してもらうことができない。初期には、それを予め見込んで、（訪問健診とは別に）日赤医療センターで処方してもらうことをしていなかった。胃薬や便秘薬のためにわざわざ病院に行くと他の病気に感染する恐れがあり、また、上の子の世話も大変なので、簡単な薬については担当助産師が処方してくれるとよい。
- ・モニターを見られないことについては、1人目の時に既に見ていること、また、妊娠後期になると見てもよく分からないことから、特に問題は感じなかった。モニターは費用がかかるので、むしろ病院でも「いらない」と思う。妊娠の経過が順調ということがわかるのであれば、病院でもモニターは除いて欲しかった。

【初産婦】

○ゆっくり話を聞いてもらえる

- ・訪問健診は1回あたり2時間程度かかり、そのうち1時間くらい担当助産師に話を聞いてもらうことができた。

○リラックス

- ・マッサージを受けられたのがよかった。
- ・自宅にいと、自分の周りの環境が普段と変わらないので、落ち着いて受診することが出来た。
- ・病院では、次の順番を待っている人に遠慮してしまうので、質問等がしづらい。

○助産師とのかかわり

- ・訪問健診ほか、担当助産師の申し出により、メールでのやり取りを行い、アドバイスをもらえたのはありがたかった。
- ・助産師を自宅に迎えることについて、抵抗はなかった。むしろ、子どもを育てる環境を助産師に見てもらうことで、アドバイスがもらえらばよいと考えた。

○移動の負担の軽減

- ・日赤医療センターまでの通院に、片道1時間半くらいかかるので、自宅に助産師に来てもらい、身体負担が少なかった。

○エコー

- ・妊娠中、エコーが見られなかったのは残念だった。
- ・エコーが見られなかったので、胎児の大きさが分からなかった。大きめといわれていたが、どのくらい大きいのか分からなかった。エコーを記念にしている人にとっては残念なのではないか。

対象者の家族にとっては、助産師が訪問することで、上の子どもとのかかわりが生まれたり、対象者の配偶者や母親が助産師から情報を得られたという意見があった。助産師が訪問で対象者にかかわることにより、対象者だけではなく、家族も含めた関係が出来上がっていることがわかる。対象者の中には、子どもを分娩に立ち合わせたケースもあるが、その場合にも、既に助産師との関係が出来上がっていることにより、安心していられた等の意見もあった。

【経産婦】

○上の子どもとのかかわり

- ・担当助産師に上の子の遊び相手になってもらった。そのため、出産の際、分娩室で会った時は既に友達のような対応で、慣れていたのがよかった。
- ・上の子も訪問健診を楽しみにしていた。
- ・上の子について、当初は区の「一時預かりサービス」を利用していたが、そのうち訪問健診に同席させるようになった。上の子は自分の家なので、担当助産師におもちゃを見せるなど、リラックスしていた。
- ・上の子が訪問健診に立ち会って、胎児の心臓の音を聞いたりすることによって、子どもが生まれてくることを楽しみにしてくれたことがよかった。
- ・上の子が1～2回同席し、心音を聞いた。
- ・子どもが1～2回同席したときは、心音を聞いたり、お腹を触ったりした。

○夫や母

- ・夫や実母が同席し、一緒に話を聞いたり、心音を聞いたり出来たのがよかった。
- ・夫が健診に立ち会って、心音を聞いたこともあった。
- ・たまたま夫が居合わせた時、心音を聞いたことがあった。

【初産婦】

- ・病院と異なり、訪問健診では、超音波検査を受けられないことに問題を感じた。途中で逆子になった時期があったので、病院では、毎回超音波検査を受けた。
- ・同席した実母も、聞きたいことが聞けたのがよかった。
- ・4回の訪問健診のうち、1回のみ夫が同席したが、夫から助産師に質問をする時間が出来てよかった。

一方、通院健診については、30分から1時間程度であり、「許容できる範囲」ということである。しかし、子どもを連れて行った場合には、それに耐えられないとのことである。

通院健診でも「医師にきちんと答えてもらった」とのことだが、それ以上に担当助産師から詳しく説明を受けており、「特に聞く必要がないくらいだった」という声が多い。